

## 糸井通浩先生追悼

面影を偲びつつ

半沢 幹一

糸井通浩先生は、秋本守英先生とじつに好対照のコンビでした。表現学会の全国大会の折は、毎回欠かさず、お揃いでお見えになりました。小柄なのに大きな声の秋本先生に対して、大柄の割にぼそぼそと早口の糸井先生。お二人とご一緒した懇親会やカラオケでは、その対照ぶりが遺憾なく発揮されて、とても楽しい思いをしました。

その秋本先生が2013年10月に、10年あまり後の、2024年1月に、糸井先生が亡くなってしまいました。秋本先生ご逝去後は、長年の相方を失ったかのように、心なしかお元気をなくされたように見受けられました。

『表現学会50年史』に掲載された糸井先生の「縁の連鎖」というエッセイによれば、表現学会に入会なさったのが1972年度で、そのきっかけも秋本先生から『表現研究』をもらったことだそうです。お二人はまさに表現学会の御縁で結ばれ続けたと言えるでしょう。そして、秋本先生は1997年から、糸井先生は2005年から、それぞれ2年間、代表理事をお務めになり、表現学会の存続に尽力してくださいました。

『表現学会50年史』の「全国大会記録」を見て、ちょっと意外だったのは、糸井先生が一度も研究発表をなさったことがないということです(笑) それでも、その存在感が大きかったのは、かつての今井先生や塚原先生と同じく、若手のどんな研究発表に対しても、心優しく有益なコメント発言をしてくださってきたからでしょう。

糸井先生と個人的に親しくさせていただくようになったのがいつ頃からなのか、定かには覚えていません。ただ、2009年に先生と共編で出した『日本語表現学を学ぶ人のために』(世界思想社)より以前なのは確かです。表現学会の委員会の後、二人で京都駅周辺の居酒屋で飲んだ時に、急にその話で盛り上がり、先生が出版社をはじめ、もろもろのお膳立てをしてくださったおかげで、実現にこぎつけることができました。

先生と直接お話しした最後は、2016年の帝塚山大学での全国大会からの帰りの電車の中でした。今後は外出もままならなくなるだろうということでしたが、実際、その通りになってしまいました。それでも長年の研究成果をまとめた大著を次々と出版し、その後も、ご自身創刊の『日本語語文化研究』という研究誌をはじめ、新聞や雑誌にも御論を発表し続けられました。

今年いただいた年賀状には、直筆のメッセージが添えられていて、まだ大丈夫と思っていた矢先の訃報でした。お通夜場で、最期のことをご令嬢にうかがうと、年賀状での挨拶をひととおり書き終えると、安心なさったのか、臥せったまま年を越し、静かに息を引き取ったとのこと。いかにも潔い先生らしい、人生のけじめのつけ方でした。その面影を偲びつつ、合掌するばかりです。

(共立女子大学名誉教授)

糸井通浩先生と京都教育大学でごいっしょさせていただいたのは、七年間に過ぎない。改めて、その短さに驚いた。時間と濃度の不整合に気づかされる思いだった。

お酒の席でのお話が多かったと思われる。研究成果というより、見識、知見を慎重かつ大胆に織り込みながら、仮説を展開してくださった。文法論、児童文学論、漫画論、国語教育の話、絵巻の話。そして、「竹取物語」の菅原道真作者論。帰納法と演繹法を巧みに織り交ぜつつ、立論されていた。帰納法的な研究手法しか持ち合わせていなかった私は驚愕するほどの衝撃を受けた。「天上に行っただかぐや姫に訊くわけにもいかんしな」とおっしゃり、にやりとされたこともあった。

私事ではあるが、私が『国語教育を学ぶ人のために』を編んだとき、糸井通浩先生には、多大なご支援をたまわった。編著者のお名前を頂戴するお許しもいただいた。

その余波として、同じ出版社から童謡唱歌の小著を出すことになった折に、私は童謡の方を任されることになった。予想外、専門外のことにたじろいでいたが、先生に背中を押していただき、資料もご提供くださり、何とか任を全うすることができた。

あるとき、糸井通浩先生は少し困ったような、ほどけたようなお顔で、「いやあ、雑誌に論文を書いたら、喫茶店で書いたような軽い論文だって批判されちゃったよ。」とおっしゃった。糸井先生は、出勤の途上、二、三軒喫茶店をハシゴされてから大学へいらしていた。当時、同じ行動パターンの同僚によく出会うとおっしゃっていたが、そんなときは、互いにするべきことがあるので、挨拶もしないといわれた。

「それで」と私は目つきで後を促した。「いやあ、凶星なんやけど」と続けられて、微笑まれた。当該の論文は、先生の噂を聞きつけた評者の卑怯な攻め口だったようだ。先生の微笑は、度が過ぎた研究の硬直さに対する無言の反批判であったのだろう。

一度だけ、糸井通浩先生とバッテリーを組んだことがある。大学の教職員ソフトボール大会の折である。私の新任の夏だった。糸井先生がキャッチャー、私がピッチャーだった。結果は予想外の好成績だったが、それよりもピッチャーとしてあれほど投げやすい相方を得たことは忘れられない。あんなに暖かく投球を受け止めてもらったことはなかった。あのキャッチャーマスク越しの温顔は今でも脳裏に刻まれている。

今頃、糸井通浩先生は、天に上られ、かぐや姫をつかまえて、あの微笑に満ちた表情で、「竹取物語」の真相を聞き出しておられるにちがいない。ひょっとしたら菅原道真公も見つけ出してインタビューをなさっておられるかもしれない。想像するだけで楽しくなってくる。ただ、その結果をおうかがいする機会が永久に失われたことは何とも残念である。今は、先生の天上での楽しく豊かな永遠の時間を祈るのみである。

(京都教育大学)

表現学会において、永く学会を牽引されてこられた顧問の糸井通浩先生が亡くなられた。先生は日本語学（国語学）を専門とされつつ、日本文学、国語教育、日本語教育、さらには地名や語源の研究など多分野にわたって先進的な研究を続けてこられた、まさに言語研究の泰斗と言うべき方であった。表現学会には一九七一年に入会され、二〇〇五年から二年間代表理事を務められたが、そのときに事務局長として先生のお手伝いをさせていただいたのが、先生と本格的に接するご縁となった。先生には、表現学会全体の活動はもとより、近畿地区例会でも、何度も自らご発表をいただき、表現研究のお手本を示していただいた。若手が発表した折には、有益なコメントをいただき、近畿地区の活動を盛り上げていただいた。

表現学会の活動では、「物語・小説の表現と視点」（『表現学論考 第二』今井文男教授古稀記念論集 昭和六一年四月）「視点と語り」（『表現学論考第三』（表現学会）平成五年一月）「小説の冒頭表現と視点」（『表現研究』六四 平成八年一〇月）などで考察された「視点」の観点は、先生の研究を語るキーワードの一つである。先生の提起された「視点」や「語り」の考察は、表現学会の中で生み出された財産として今後も受け継いでいきたい概念である。また、「音数律論のために一和歌リズムの諸問題（一）」（『表現研究』第二号昭和五〇年三月）「音数律論のために一和歌リズムの諸問題（二）」（『表現研究』第二号昭和五一年三月）など、リズム論の論考もある。糸井表現学の裾野の広さが窺える。先生は、文学から漫画・歌謡曲に至るまで、さまざまな言葉の研究を実践なさったのである。

私個人も先生の元で事務局長として学会の運営の仕方を学んだほか、研究分野においても先生の「語り」の理論には多く裨益していただいた。私の研究の根幹を作っていただいたと言っても過言ではない。龍谷大学では博士論文の審査もしていただき、その後も先生のご研究から学び取った点は数多い。個人的な面では、龍谷大学の提携する中国・韓国の大学への視察旅行にお供させていただいたことも楽しい思い出である。そのとき同行していた若い院生や派遣先の院生に接しておられた好々爺のようなお姿が懐かしく思い出される。あるいは全国大会の懇親会で「赤とんぼ」を歌いながら、日本語のリズム論を語る先生の楽しそうなお姿が目につく。言語研究とは、いろいろな姿を見せる言葉の海を遊泳するようなもので、自分の身をその中に置いて楽しむことだと教えて頂いたように思う。先生から得た学恩は計り知れないが、先生の遙か後ろを行くものとして、その学恩を忘れずに、今後も学会の発展に尽力したいと考える。（同志社大学教授・表現学会代表理事）

糸井通浩先生 履歴・業績

[略歴]

- 1938年8月 京都市・嵯峨に生まれる  
1954年4月 京都府立峰山高等学校入学(1957年3月卒業)  
1957年4月 京都学芸大学(現京都教育大学)国文学科Ⅱ類入学(1959年3月退学)  
1959年4月 京都大学文学部文学科(国語学国文学専攻)編入学(1961年3月卒業)  
1961年4月 大阪府立豊中高等学校教諭(1964年3月まで)  
1964年4月 京都府立峰山高等学校教諭(1966年3月まで)  
1966年4月 京都教育大学付属高等学校教諭(1975年3月まで)  
1971年4月 表現学会会員  
1975年4月 愛媛大学法文学部 専任講師(1977年3月まで)  
1977年4月 愛媛大学法文学部 助教授(1982年3月まで)  
1982年4月 京都教育大学教育学部 助教授(1987年3月まで)  
1987年4月 京都教育学部教育学部 教授(1994年3月まで)  
1988年3月 北京日本学術研究センター(北京外国語大学) 客員教授(1988年7月まで)  
1994年4月 京都教育大学 名誉教授  
1994年4月 龍谷大学文学部 教授(2007年3月まで)  
2005年6月 表現学会代表理事に就任(2007年5月まで)  
2007年4月 光華女子大学文学部 教授(2011年3月まで)  
2011年6月 表現学会顧問に加わる  
2024年1月8日 逝去

[主要著書]

- 古典への出発 小倉百人一首(共著) 1969年 中央図書出版社  
後拾遺和歌集総索引 本文・校異・索引・研究(共著) 1976年 清文堂  
私家集 小町業平遍昭友則能因範永 総索引(共著) 1979年 清文堂  
後拾遺和歌集伝惟房筆本 1981年 青葉図書  
鈴鹿本大和物語 1981年 和泉書院  
小倉百人一首の言語空間—和歌表現史論の構想—(共著) 1989年 世界思想社  
物語の方法—語りの意味論—(共編著) 1992年 世界思想社  
風呂で覚える百人一首(共著) 1992年 教学社  
国語教育を学ぶ人のために(植山俊宏共編) 1995年 世界思想社  
風呂で読む唱歌 1997年 世界思想社  
小倉百人一首を学ぶ人のために(編者) 1998年 世界思想社  
奈良絵本 龍谷大学善本叢書(責任編集) 2002年 思文閣出版  
日本地名学を学ぶ人のために(共編書) 2004年 世界思想社

- 京都の地名検証(共編著) 2005年 勉誠出版  
 京都学の企て(編集・企画) 2006年 勉誠出版  
 京都の地名検証2(共編著) 2007年 勉誠出版  
 日本古典随筆の研究と資料 龍谷大学仏教文化研究叢書(編著)  
 2007年 思文閣出版  
 王朝物語のしぐさとことば(神尾暢子共編) 2008年 清文堂出版  
 京の歴史・文学を歩く(編著) 2008年 勉誠出版  
 日本語表現学を学ぶ人のために(半沢幹一共編) 2009年 世界思想社  
 京都学を楽しむ 2010年 勉誠出版  
 京都地名語源辞典(吉田金彦・綱本逸雄共編) 2013年 東京堂出版  
 地名が語る京都の歴史(共編著) 2016年 東京堂出版  
 日本語論の構築 2017年 清文堂出版  
 古代文学言語の研究 2018年 和泉書院  
 「語り」言説の研究 2018年 和泉書院  
 谷間の想像力 2018年 清文堂出版  
 かぐや姫と菅原道真—私の「竹取物語」論— 2019年 和泉書院  
 古代地名の研究事始め—山城・丹後の伝承・文学地名を中心に—  
 2019年 清文堂出版  
 近江の地名—その由来と変遷—(共著) 2020年 サンライズ出版

[学術論文](但し、注釈やエッセイなどを除く)

- 「絵巻詞書の文章」序論 『國語國文』第30巻10号 1961年10月  
 「なりけり」構文—平安朝和歌文体序説  
 『京教大附高研究紀要』第6号 1969年 3月  
 読むことへの文法活用1—古典文法教育のあり方—  
 『京教大附高研究紀要』第8号 1970年 6月  
 「けり」の文体論的試論—古今集詞書と伊勢物語の文章—  
 『王朝』第四冊(中央図書出版) 1971年 8月  
 教材の価値について—童話・民話の教材化の試み—  
 『京教大附高研究紀要』第10号 1971年10月  
 和歌形式生成の論理序説 『國語国文』第41巻第4号 1971年 4月  
 「五三七」リズムの歴史性社会性—三輪歌謡圏と大伴氏族—  
 『國語と國文學』第49巻第5号 1972年 5月  
 高等学校における創造性の育成の実践—文学教材における言語教育の視点—  
 『季刊国語教育誌』第2巻3・4合併号 1973年 3月  
 貫之の文章—仮名文の構想と「なりけり」表現—  
 『王朝』遠藤嘉基博士古稀記念論叢(中央図書出版) 1974年 8月

勅撰和歌集名歌評釈(四)—難波江の芦間の月—

- 『王朝』第七冊(中央図書出版) 1974年 9月
- 意義・意味・意図—言語と言語教育 『京教大附高研究紀要』第17号 1975年 3月
- 音数律論のために—和歌リズムの諸問題(一) 『表現研究』第21号 1975年 3月
- 音数律論のために—和歌リズムの諸問題(二) 『表現研究』第23号 1976年 3月
- 三島由紀夫「金閣寺」構造試論—文章論における意図をめぐって—  
『愛媛大学法文学部論集』第9号 1976年12月
- 「なりけり」語法の表現価値 『國文學』第22巻第1号(學燈社) 1977年 1月
- 後拾遺集、伝本と表現の一問題 『國語國文』第46巻第5号 1977年 5月
- 安房直子「鳥」の構造分析 『解釈』第23巻12号(解釈学会) 1977年12月
- 「こと」認識と「もの」認識—古代文学における、その史的展開—  
『論集日本文学・日本語1上代』(阪倉篤義監修・角川書店) 1978年 3月
- 卷八山部赤人春雑歌の性格  
『万葉集を学ぶ』第5集(伊藤博外編・有斐閣) 1978年 6月
- 「原」「野」語誌考・続貂 『愛文』第15号 1979年 7月
- 初期物語の文章、二・三の問題—「語り」の志向するもの—  
『古代文学研究』第4号 1979年 8月
- 表現と距離—シンポジウムの司会を契機に考えたこと—  
『表現研究』第30号 1979年 9月
- 『大和物語』の文章 『愛媛国文研究』第29号 1979年12月
- 「百合」(川端康成 掌の小説)—その構造と思想  
『解釈』第26巻第1号 1980年 1月
- 古代和歌における助動詞「き」の表現性  
『愛媛大学法文学部論集』第13号 1980年12月
- 基本認識語彙と文体—平安和文系作品を中心として—  
『国語語彙史の研究』二(和泉書院) 1981年 5月
- 源氏物語と助動詞「き」 『源氏物語の探求』第六輯(風間書房) 1981年 8月
- 「体用」論と「相」—連歌学における  
『国語学史論叢』(竹岡正夫編・笠間書院) 1982年11月
- 「歴史的現在(法)」と視点 『京都教育大学国文学会誌』第17号 1982年12月
- 文末表現の問題 『日本語学』第1巻第2号 1982年12月
- 場面依存と文法形式—国語における 『表現研究』第37号 1983年 3月
- 伊勢物語の「補注」  
『一冊の講座 伊勢物語』(日本の古典文学2・有精堂) 1983年 3月
- 梁塵秘抄三九八番歌研究ノート 『京都教育大学国文学会誌』第18号 1983年 6月
- 和歌集の語彙索引 『書誌索引展望』 1984年 5月
- 文章論的文体論 『日本語学』第4巻第2号 1985年 2月

「あしずり」語誌考	『国語語彙史の研究』六(和泉書院)	1985年10月
物語・小説の表現と視点		
	『表現学論考第二』今井文男教授古稀記念論集	1986年4月
転換—土部連接論に学び考える—		
	『国語表現研究』第三号(大教大国語表現研究会編)	1986年12月
物語文学の表現	『体系物語文学史』第二卷(三谷栄一編・有精堂)	1987年2月
小説冒頭の「は」と「が」(覚書)	『京都教育大学国文学会誌』22号	1987年6月
新古今集の文法	『国语法講座』第五卷(山口明穂編・明治書院)	1987年6月
中古文学と接続語—「かくて」「さて」を中心に—		
	『日本語学』第6巻第9号	1987年9月
勅撰和歌集の詞書—「よめる」「よみ侍りける」の表現価値—		
	『國語國文』56巻10号	1987年10月
王朝女流日記の表現機構—その視点と過去・完了の助動詞—		
	『國語と國文學』64巻11号	1987年11月
文体としてみた「マンガのことば」	『日本語学』8巻9号	1989年9月
感想文・意見文・記録報告文を書き分ける		
	『國文學』35巻15号(臨時号)	1990年12月
助動詞の複合「ならむ」「なるらむ」—散文体と韻文体と—		
	『国語語彙史の研究』十一(和泉書院)	1990年12月
「ながむ・ながめ」の変遷—古代和歌における「孤」の意識—		
	『世界思想』18号	1991年春号
語彙・語法にみる時空認識		
	『古代の祭式と思想』(中西進編・角川選書)	1991年5月
桐壺院『物語を織りなす人々』	『源氏物語講座2』(勉誠社)	1991年9月
連体修飾の表現機構	『表現研究』第54号	1991年12月
「学校文法」への提言—「文節」をどう位置づけるかをめぐって—		
	『京都教育大学紀要』八一号	1992年10月
人物提示の存在文と同格準体句一字治拾遺物語を中心に—		
	『藤森ことば論集』(清文堂)	1992年10月
枕草子の語法一つ—連体接「なり」の場合—		
	『國語と國文學』69巻11号	1992年11月
小説冒頭表現と視点	『文化言語学』(林四郎編・三省堂)	1992年11月
視点と語り	『表現学論考第三』(表現学会)	1993年1月
公任「三船の才」語(大鏡)再考—指示語の機能と語り—		
	『説話論集』第3集(清文堂)	1993年5月
古代文学と言語学	『古代文学とは何か』古代文学講座1(勉誠社)	1993年7月

- かな散文と和歌表現—発想・表現の位相—  
『和歌と物語』和歌文学論集3(風間書房) 1995年 9月
- 生きる力を育てる「言語の教育」  
『幼児教育を学ぶ人のために』(共編・世界思想社) 1994年 8月
- 源氏物語と視点 『新講 源氏物語を学ぶ人のために』(世界思想社) 1995年 2月
- 中古の助動詞「き」と視点  
『京都教育大國文学会誌』24号・25号合併 1995年 2月
- 文と文の接続 『解釈と鑑賞』60巻7号(至文堂) 1995年 6月
- 手爾葉大概抄及び手爾葉大概抄之抄を読む  
『國語と國文學』72巻11号 1995年 6月
- 「語り」言語の生成—歌物語の文章— 『龍谷大学論集』447 1996年12月
- 「ないじゃなし」再考—流行歌の國語学的研—  
『王朝』10(中央図書) 1996年12月
- 小説の冒頭表現と視点 『表現研究』第64号 1996年10月
- 現代マンガの表現論 『日本語学』16巻6号 1997年 6月
- 生徒は古典文法の何に躓くか—学習のポイントを探る  
『國文學』43巻11号(學燈社) 1998年10月
- 源氏物語の文体—「いかに書かれているか」の論—  
『源氏物語研究集成』第3巻(風間書房) 1998年11月
- 地名(歌枕)の語構成—連体助詞『の・が』をめぐる  
『国語語彙史の研究』二十(和泉書院) 2001年 3月
- 伝え合う喜び 『新しい幼児教育を学ぶ人のために』(世界思想社) 2001年10月
- 学校教育と敬語—敬語存在をどう捉えるか  
『月刊国語教育』21巻10号 2001年12月
- 日本語助詞の体系 『日本語学と言語学』(玉村文郎編・明治書院) 2002年 1月
- 文章・談話研究の歴史と展望  
朝倉日本語講座7 文章・談話』(朝倉書店) 2003年 3月
- 地名「間人」について—「はし」をめぐる— 『地名探求』創刊号 2003年 4月
- 古今集の文法  
『古今和歌集研究集成』第2巻(増田繁夫外編・風間書房) 2004年 2月
- 「うか・うけ」の系譜 『朱』47号(伏見稲荷大社) 2004年 3月
- 日本語のリズムと〈うた〉のリズム(一)—「四拍子論」を見直す—  
『日本言語文化研究』第7号 2005年 7月
- 日本語のリズムと〈うた〉のリズム(二)—「四拍子論」を見直す—  
『日本言語文化研究』第8号 2005年12月
- とそ本にはべめる 『宇治十帖の企て』(関根賢司編・おうふう) 2005年12月

過程(様態・対象)と結果—個別研究を包括する研究、の一つの試み(一)

- |                               |               |          |
|-------------------------------|---------------|----------|
|                               | 『日本語文化研究』第12号 | 2008年 4月 |
| 『枕草子』の語法(二)—随想章段にみる「時」の認識と叙述法 |               |          |
|                               | 『日本語文化研究』第15号 | 2011年 4月 |
| 三年坂(産寧坂)考—伝承と地名—              | 『地名研究』11号     | 2013年 4月 |
| 日本語の哲学<その一>                   | 『日本語文化研究』第18号 | 2013年12月 |
| 山名「大江山」、丹後定着への道               | 『地名探求』12号     | 2014年 4月 |
| 日本語の哲学<その二>                   | 『日本語文化研究』第19号 | 2015年 1月 |
| 日本語の哲学<その三>                   | 『日本語文化研究』第20号 | 2015年11月 |
| 日本語の哲学<その四>                   | 『日本語文化研究』第21号 | 2017年 1月 |

過程(様態・対象)と結果—個別研究を包括する研究、の一つの試み(二)

- |                            |               |          |
|----------------------------|---------------|----------|
|                            | 『日本語文化研究』第21号 | 2017年 1月 |
| 「日本語の哲学」の企て—研究ノート          | 『日本語文化研究』第22号 | 2018年 1月 |
| 「匏宮(よさのみや)」(丹後国一宮 籠神社の奥宮)考 |               |          |
|                            | 『地名探求』17号     | 2019年 4月 |
| 日本語の屈折史<一>—続「日本語の哲学」       |               |          |
|                            | 『日本語文化研究』第25号 | 2020年 8月 |
| 日本語の屈折史<二>—「語り」言説の近代化      |               |          |
|                            | 『日本語文化研究』第26号 | 2021年 9月 |
| 日本語の屈折史<三>—「語り」言説の近代化      |               |          |
|                            | 『日本語文化研究』第27号 | 2023年 1月 |
| 地名「桂」考                     | 『日本語文化研究』第28号 | 2023年10月 |

※履歴・業績については、京都教育大学の植山俊宏氏、龍谷大学の余田弘実氏に御協力を賜った。